

2章

授業の計画にあたって

いま求められている学力を生徒に身に付けさせるために、どのような授業をすればよいのでしょうか。また、そのための計画は、どのように立てればよいのでしょうか。

第2章では、授業の計画について説明します。

ここがポイント
 教育課程の改善・充実は
 全ての教職員で行おう

1 カリキュラム・マネジメント

☆社会に開かれた教育課程

各学校が、社会との関わりを考え、社会とのつながりを意識した教育課程を編成し、社会と共有・連携しながら実施していくことです。

平成28年12月21日の中央教育審議会答申では「社会に開かれた教育課程」について次の三つの側面が示されています。

① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育ていくこと。

③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

「カリキュラム・マネジメント」とは

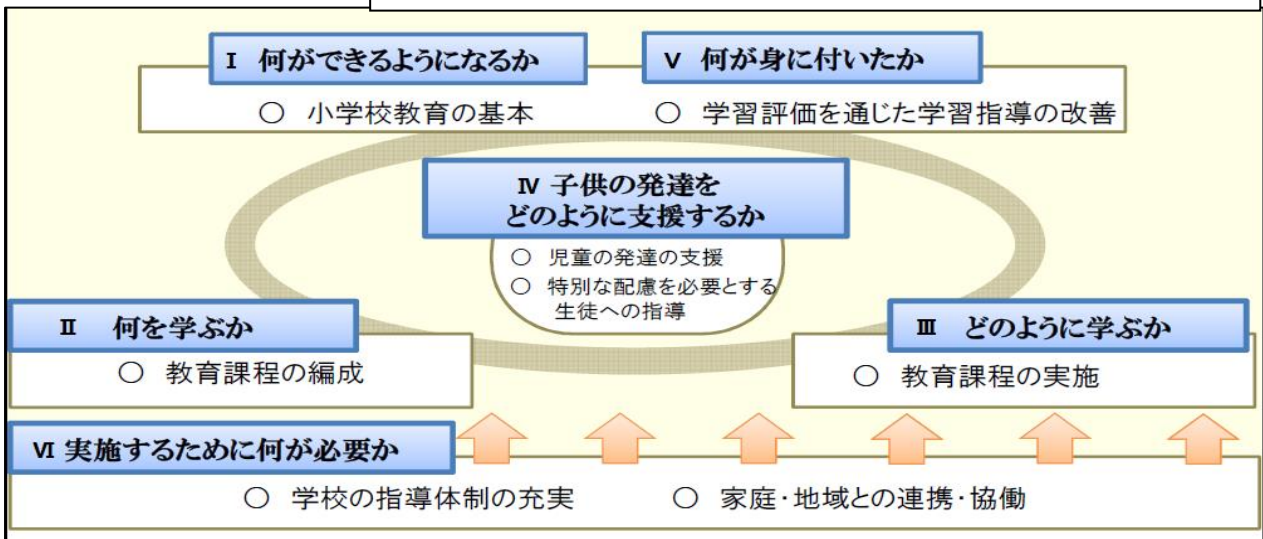
カリキュラム・マネジメントとは、各学校の教育目標を達成するため、教育課程を実施し、評価して、改善していくことです。

○これからの時代に求められる資質・能力を育むために
 ・各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要があります。

・教科等の内容について、「カリキュラム・マネジメント」を通じて相互の関連付けや横断を図り、必要な教育内容を組織的に配列し、各教科等の内容と教育課程全体とを往還させるとともに、人材や予算、時間、情報、教育内容といった必要な資源を再配分することが求められます。

・特に高等学校においては、教科・科目選択の幅の広さを生かしながら、生徒に育成する資質・能力を明らかにし、具体的な教育課程を編成していくことが求められます。

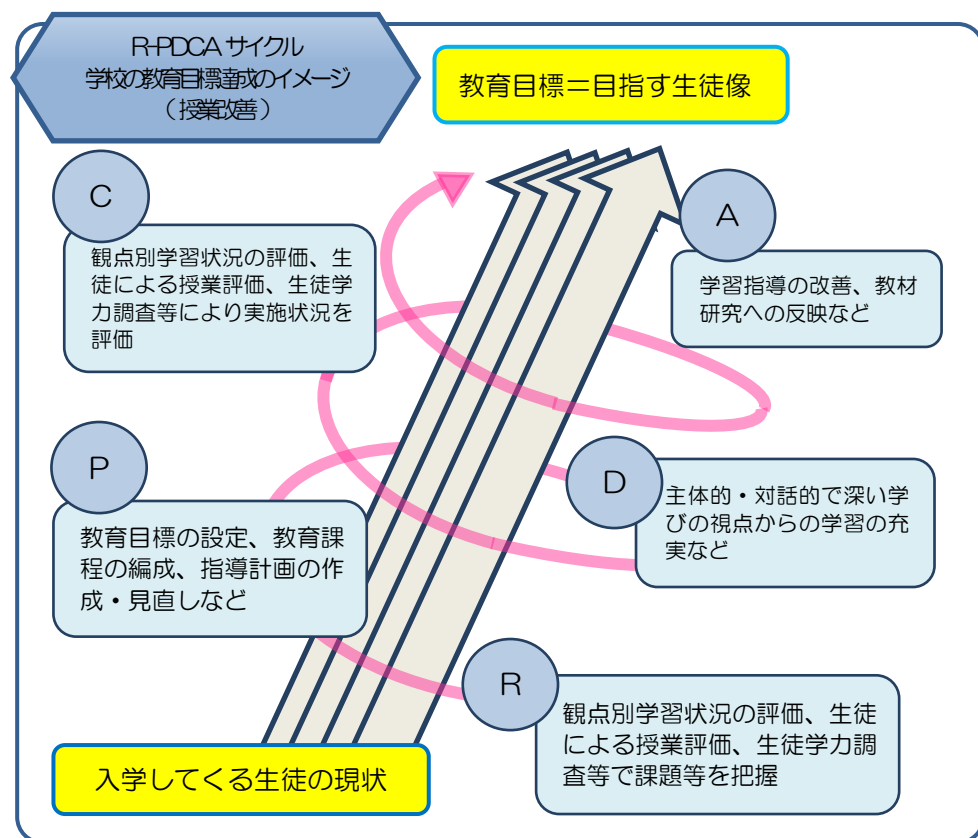
学習指導要領総則の構造と「カリキュラム・マネジメント」のイメージ



「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面

社会に開かれた教育課程の実現を通じて、生徒たちに必要な資質・能力を育成するという、新しい学習指導要領等の理念を踏まえると、これからの「カリキュラム・マネジメント」は、次の三つの側面から捉えることができます。
(中教審答申からの抜粋)

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。



- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

カリキュラム・マネジメントを進める中で：

- カリキュラム・マネジメントを通して学校の課題の改善を図るには、**学校の教育課程に関する現状を把握**することが大切です。
- 「観点別学習状況の評価」や「生徒による授業評価」の結果を分析し、学校として、生徒に身に付けさせたい力の育成状況を的確に把握しましょう。
- そこから複数の課題を見出し、**重要度や優先順位による絞り込み**を行い、改善に取り組みましょう。

各学校においては、生徒の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることが重要です。

なお、各教科及び総合的な学習の時間で育成した資質・能力を相互に関連付け、他の教科で育成した資質・能力が別の教科等の学習にいかされるようにすることが大切です。

内部の資源の活用の例としては、各教員が授業で用いた教材やワークシート等を教科として整理し、教員間で共有することが挙げられます。

また、地域等の外部の資源の活用としては、地域と連携した体験的学習活動や、インターシップの実施などがあります。学校内外の様々な人的・物的資源を効果的に活用していきましょう。

【参考】

リーフレット
「カリキュラム・マネジメントで改善充実の好循環へ」
チーム学校がパワーになる!!

平成29年7月 神奈川県立総合教育センター

2 「生徒に身に付けさせたい力」は何だろう

教科・科目の目標と内容を押さえる

授業を計画するとき、まず学習指導要領を確認します。授業は、学習指導要領に書かれた、各教科・科目の「目標」と「内容」に基づかなければなりません。それが「生徒に身に付けさせたい力」の基盤です。各教科・科目の「目標」「内容」は、「学力の3要素」（序章）を踏まえたものになっています。

学校の教育目標を押さえる

教師一人ひとりが生徒に対して「こうなってほしい」「こういう力をつけてほしい」という願いを持つことは、とても重要なことです。しかし、授業は、個人ではなく学校が行うものです。学校が定めている「はぐくみたい生徒像」や「各学校が求める学力（学力向上の目標）」を確認し、その実現のためには、教科・科目として、どのような力を身に付けさせればよいかを考えていくという視点も欠かせません。

1章-2に詳しい説明がありますので、確認しておきましょう。

生徒の実態を把握する

以上のような要素を基にして定めた目標に対し、今、目の前の生徒がどのような状況にあるのかを分析していきましょう。何が足りないのか、何が得意で何が不得意なのか。目標と生徒の実態を重ね合わせることで、「生徒に身に付けさせたい力」の姿が、自ずと立ち現れてくるでしょう。

☆「はぐくみたい生徒像」

「各学校が求める学力 （学力向上の目標）」

これについては、「組織的な授業改善に向けて～高等学校における授業研究の取組～」(平成24年3月)に詳しく説明されています。神奈川県が目指す授業の基本となる部分ですので、必ず目を通しておきましょう。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

生徒理解が出発点です！

「身に付けさせたい力」は、生徒一人ひとりの状況に合わせてはぐくんでいくものです。日頃から、生徒の学習全般の傾向、理解・表現の特徴、感じ方などの情報を蓄積するようにしましょう。さらに、既習事項の習得度、特性やつまずきのポイントを把握することが、個に応じ適切に身に付けさせることにつながります。



「年間指導計画」の考え方

「年間指導計画」は教材の配列ではなく、年間を通して教科・科目の目標の実現を目指していくための計画となるようにしましょう。

〈例〉 数学・数学Ⅰ 平成××年度 「年間指導計画」

教科・科目	数学・数学Ⅰ	学年	第1学年	教科書	××堂「改新編 数学Ⅰ」																																																								
		単位数	4単位	副教材	××出版「問題精査 数学Ⅰ」 ××書店「反復演習 数学Ⅰ」																																																								
学習目標	数と式、図形と計量、二次関数、データの分析の考え方を身に付け、数学のよさを認識できるようにします。また、事象を数学的に考察する能力を養い、問題を解決する力を目標とします。 学習指導要領の各科目の目標を元に記載する。																																																												
学習方法	○ 授業における課題に対して自ら考え、また、周りの生徒と共同で考える活動を行います。 ○ 授業においては数学専用の演習ノートを利用します。 ○ 家庭学習における課題を定期的に提出してもらいます。最後まであきらめずに取り組みましょう。																																																												
学習評価	<table border="1"> <thead> <tr> <th>評価の観点</th> <th>科目の評価の観点の趣旨</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a 関心・意欲・態度</td> <td rowspan="4"> 数と式、図形と計量、二次関数及びデータの分析の考え方に関心を持つとともに、数学のよさを認識し、単元の評価規準の基になるもの。国立教育政策研究所発行の資料に、主な科目についての例示が掲載されている。ここにはないものは、「教科の評価の観点及びその主旨」と学習指導要領の「教科の目標」を参考に、各学校で設定する。 処理する仕方や推論の規則などを理解し、知識を身に付けている。 </td> </tr> <tr> <td>b 数学的な見方や考え方</td> </tr> <tr> <td>c 数学的な技能</td> </tr> <tr> <td>d 知識・理解</td> </tr> </tbody> </table> <p>※定期テストに関しては、上記四つの観点それぞれについて学習内容に応じて適切に配分しています。</p>					評価の観点	科目の評価の観点の趣旨	a 関心・意欲・態度	数と式、図形と計量、二次関数及びデータの分析の考え方に関心を持つとともに、数学のよさを認識し、単元の評価規準の基になるもの。国立教育政策研究所発行の資料に、主な科目についての例示が掲載されている。ここにはないものは、「教科の評価の観点及びその主旨」と学習指導要領の「教科の目標」を参考に、各学校で設定する。 処理する仕方や推論の規則などを理解し、知識を身に付けている。	b 数学的な見方や考え方	c 数学的な技能	d 知識・理解																																																	
	評価の観点	科目の評価の観点の趣旨																																																											
a 関心・意欲・態度	数と式、図形と計量、二次関数及びデータの分析の考え方に関心を持つとともに、数学のよさを認識し、単元の評価規準の基になるもの。国立教育政策研究所発行の資料に、主な科目についての例示が掲載されている。ここにはないものは、「教科の評価の観点及びその主旨」と学習指導要領の「教科の目標」を参考に、各学校で設定する。 処理する仕方や推論の規則などを理解し、知識を身に付けている。																																																												
b 数学的な見方や考え方																																																													
c 数学的な技能																																																													
d 知識・理解																																																													
学習評価	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">学期</th> <th rowspan="2">内容のまとめ</th> <th rowspan="2">単元（題材）</th> <th rowspan="2">学習内容</th> <th colspan="4">評価の観点</th> <th rowspan="2">単元（題材）の評価規準</th> <th rowspan="2">評価方法</th> </tr> <tr> <th>a</th> <th>b</th> <th>c</th> <th>d</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="5">前期</td> <td rowspan="5">(1) 数と式</td> <td>実数</td> <td>実数</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td rowspan="5"> a: 数の体系を拡張する過程や数の四則計算に関心を持ち、それらを数の考察に活用しようとしている。 b: 学習指導のねらいが、生徒の学習状況として実現されたときの姿を具体的に示したもの。各学校において、観点の「おおむね満足できる」状況を評価規準として設定する。 c: パン図などを用いて事象を整理しそれらを多面的・統合的に見たり、事象を命題として表現し考察したりすることができる。 d: 集合の共通部分や和集合、補集合などを求めたり、命題の逆・裏・対偶について真偽を証明したりする </td> <td rowspan="5"> ・レポート ・確認テスト ・評価規準と対応するように評価方法を準備する。 </td> </tr> <tr> <td>当該科目の全ての学習内容におけるバランスを考えて単元（題材）を設定する。</td> <td>絶対値</td> <td>学習内容の各項目において特に重点的に評価を行う観点に○を付けている。</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>根号を含む式の計算</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>集合</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>命題と条件</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>逆・対偶・裏</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>					学期	内容のまとめ	単元（題材）	学習内容	評価の観点				単元（題材）の評価規準	評価方法	a	b	c	d	前期	(1) 数と式	実数	実数	○				a: 数の体系を拡張する過程や数の四則計算に関心を持ち、それらを数の考察に活用しようとしている。 b: 学習指導のねらいが、生徒の学習状況として実現されたときの姿を具体的に示したもの。各学校において、観点の「おおむね満足できる」状況を評価規準として設定する。 c: パン図などを用いて事象を整理しそれらを多面的・統合的に見たり、事象を命題として表現し考察したりすることができる。 d: 集合の共通部分や和集合、補集合などを求めたり、命題の逆・裏・対偶について真偽を証明したりする	・レポート ・確認テスト ・評価規準と対応するように評価方法を準備する。	当該科目の全ての学習内容におけるバランスを考えて単元（題材）を設定する。	絶対値	学習内容の各項目において特に重点的に評価を行う観点に○を付けている。				根号を含む式の計算						集合						命題と条件								逆・対偶・裏					
学期	内容のまとめ	単元（題材）	学習内容	評価の観点						単元（題材）の評価規準	評価方法																																																		
				a	b	c	d																																																						
前期	(1) 数と式	実数	実数	○				a: 数の体系を拡張する過程や数の四則計算に関心を持ち、それらを数の考察に活用しようとしている。 b: 学習指導のねらいが、生徒の学習状況として実現されたときの姿を具体的に示したもの。各学校において、観点の「おおむね満足できる」状況を評価規準として設定する。 c: パン図などを用いて事象を整理しそれらを多面的・統合的に見たり、事象を命題として表現し考察したりすることができる。 d: 集合の共通部分や和集合、補集合などを求めたり、命題の逆・裏・対偶について真偽を証明したりする	・レポート ・確認テスト ・評価規準と対応するように評価方法を準備する。																																																				
		当該科目の全ての学習内容におけるバランスを考えて単元（題材）を設定する。	絶対値	学習内容の各項目において特に重点的に評価を行う観点に○を付けている。																																																									
		根号を含む式の計算																																																											
		集合																																																											
		命題と条件																																																											
		逆・対偶・裏																																																											

参考：「学習評価の手引き」 平成 25 年 1 月 神奈川県教育委員会

具体的な記述の例は、参考資料-2をご覧ください。

教科ごとの「年間指導計画」の考え方については、以下の資料を参考にしてください。

評価規準の参考資料

○「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校）」

平成 24 年 7 月、平成 25 年 3 月 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidouairyuu.html>

○「学習評価の手引き」

平成 25 年 1 月 神奈川県教育委員会

単元（題材）を通して
身に付けさせたい力を
考える

3 単元（題材）目標の考え方

単元（題材）の目標を設定する

☆「単元（題材）」とは

単元とは、各教科の内容をある程度のまとまりで捉えたものです。学習指導要領の内容から、まとまりを考えるとよいでしょう。また、教科・科目によっては「単元」ではなく「題材」として内容のまとまりを捉えることもあります。

前項で述べたとおり、年間指導計画は、「生徒に身に付けさせたい力」をどのようなステップで身に付けさせていくかという計画です。ですから、単元（題材）の目標は、年間の流れを意識した上で、当該の単元（題材）で身に付けさせたい力を示すものです。

単元（題材）目標を立てる際に、教師の思いや願いのみをつづけていませんか。それは大切にすべきことなのですが、まず、学習指導要領を確認することが重要です。現在、定められている評価は「目標に準拠した評価」ですので、その評価の大本となる目標を設定することが必須条件となります。そして、目標設定の基本は、まずは学習指導要領の「指導内容」です。我々教師は、この内容を漏れなく指導する必要があります。

☆「目標に準拠した評価」

とは

学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らしてその実現状況を捉えるものです。

単元（題材）の目標の重点化

単元（題材）の目標とは、その単元（題材）を通して生徒たちにどのような力を身に付けさせたいかを示すものです。教師として生徒に身に付けさせたい力は、たくさんあると思います。しかし、効果的な指導のためには、思い切ってねらいを絞ることが大切です。

一つの単元（題材）にあれもこれも詰め込むのではなく、一つの単元（題材）の目標は重点化し、それを1年間積み重ねることで、最終的に教科・科目の目標を実現させるという視点を持ちましょう。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

生徒に応じたステップアップを

生徒の学習の進度は、みんな一緒ではありません。目標に対してどこまで実現することができるかは一人ひとり異なります。生徒を頭に描いて、一人ひとりにあった無理のないステップアップを考えましょう。



単元（題材）の目標の設定例

地理歴史（地理B）「(3) イ 現代世界の諸地域」

〈学習指導要領の内容〉

現代世界の諸地域を取り上げ、歴史的背景を踏まえて多面的・多角的に地域の変容や構造を考察し、それらの地域にみられる地域的特色や地球的課題について理解させるとともに、地誌的に考察する方法を身に付けさせる。



単元名 「なぜ、中華人民共和国は急激な経済成長を遂げているのだろう」

単元の目標

- ① 中華人民共和国（以下、中国という）の地理的事象から課題を見だし、それらを歴史的背景を踏まえて動態地誌的に考察させるとともに、その過程や結果を適切に表現させる。
- ② 中国の地域的特色や地球的課題、他の事象と有機的に関連付けて地誌的に考察する方法を理解させるとともに、その知識を身に付けさせる。

芸術（美術I）「A 表現（1）絵画・彫刻」「B 鑑賞」

〈学習指導要領の内容〉

「A 表現（1）絵画・彫刻」

- ア 感じ取ったことや考えたこと、夢や想像などから主題を生成すること。
- イ 表現形式の特性を生かし、形体、色彩、構成などを工夫して創造的な表現の構想を練ること。
- ウ 意図に応じて材料や用具の特性を生かすこと。
- エ 表現方法を工夫し、主題を追求して表現すること。

「B 鑑賞」

- ア 美術作品などのよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、理解を深めること。



題材名 「私と居場所」（絵画）

題材の目標

私と居場所というテーマを基に、自己の内面を深く見つめ、主題を生成し、造形的な効果を生かし創造的に表現するとともに、他の生徒の作品から作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り味わう。

参考：「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校）」
平成24年3月 国立教育政策研究所 教育課程研究センター

「単元（題材）の目標」の主語は誰？

上記の例の「地理歴史（地理B）」「芸術（美術I）」、二つの「単元（題材）の目標」を見比べてください。何か気付くことはありませんか？「地理歴史（地理B）」の場合は、文末が「～表現させる」「～身に付けさせる」、「芸術（美術I）」の場合は、文末が「～感じ取り味わう」となっています。つまり、目標の主語が異なっているのです。

教科によって、「教師」を主語にした方が目標を設定しやすいものと、「生徒」を主語にした方が目標を設定しやすいものがあります。重要なのは「視点を定める」ということです。少なくとも、目標の主語が混在するということがないように気を付けましょう。

4 評価規準をはじめに押さえよう

評価規準を設定することの意味

「評価」とは何でしょうか？評価は、生徒の学習状況を検証するだけにとどまらない、大きな意味を持っています。

授業を行うときには、学習指導のねらいが明確であるということ、そしてその実現のための工夫がなされているということが、とても大切です。学習活動からではなく、評価規準に基づいて授業を組み立てることは、その授業におけるねらいをより明確にし、指導のぶれを防ぎます。

また、ねらいがはっきりしていることは、教師だけでなく生徒にとっても必要なことです。自分たちが行っている学習活動が、どのような意味を持つのかを知ることで、授業への意欲は高まり、内容の理解も深まると考えられます。

評価規準は誰がどのように設定するのか

では、評価規準はどのように設定すればよいのでしょうか。基本となるものは、学習指導要領の「目標」「内容」です。高等学校では様々な校種、教科・科目があり、学校ごとに評価規準を設定することになっています。学校が掲げる「育てたい生徒像」の実現のために、教科として何をしなくてはならないのか、学習指導要領を踏まえ、さらに目の前の生徒をよく見て、評価規準を設定しましょう。

また、評価規準の設定は個人ではなく、組織的に「学校」として行われるべきものですから、同じ教科・科目の教員同士で内容をよく相談することが必要です。これは評価の妥当性と信頼性を高めるとともに、教員一人ひとりの負担を軽減することにもつながります。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

生徒の良さを引き出し、可能性を伸ばす評価

何のためにどのように活動をすればよいか分かりやすく提示されていると、生徒自身も活躍できそうな場面やチャレンジできる場面を意識することができます。生徒の主體的・意欲的な参加を認めつつ、発達段階や認知特性に応じた評価規準を段階的に設けることで、次の指導につなげていきましょう。



指導と評価の一体化

評価規準を設定し授業を実施するという事は、教員が自らの指導について振り返ることに役立ちます。もし、生徒の学習の実現状況が良くない場合は、その原因を生徒のみに求めるのではなく、目標の実現のためにふさわしい指導がなされたのかどうかを省みる必要があります。

授業の過程の中では、要所で生徒の学習状況を確認し、「努力を要する」状況（C）と判断した生徒がいた場合には、何らかの手立てを施さなければなりません。（C）をそのままにしていはいけない、それが「指導と評価の一体化」なのです。

評価とは、定期考査（ペーパーテスト）の得点や指導要録の評定付けとイコールではありません。指導の工夫・改善を進めるきっかけとしての視点をしっかりと持ちましょう。→ 4章-6

新しい評価のポイント

関心・意欲・態度（4章-2）

各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を生徒が身に付けているかどうかを評価します。これについても意図的・計画的な指導が必要です。例えば、学習の初期段階で診断的評価を行い、指導を経てどのような変化があったのかをみるような工夫が必要です。

思考・判断・表現

各教科の内容等に即して思考・判断したことについて、その内容を言語活動（3章-2）を中心とする表現に係る活動と一体的に評価します。思考・判断の結果だけではなく、その過程を含めて評価する工夫が必要です。

技能

各教科において習得すべき技能を生徒が身に付けているかどうかを評価します。新たに設定された「思考・判断・表現」と、従来の「技能・表現」の「表現」の混同を避けるために「技能」と改められました。

知識・理解

各教科において習得すべき知識や重要な概念等を生徒が身に付けているかどうかを評価しますが、「知識・理解」が身に付かなければ、「思考・判断・表現」のための活動ができないわけではありません。「思考・判断・表現」を評価するための活動（言語活動）が、「知識・理解」の定着を助けることもあります。基本的には、この二つの観点は双方向に補完すると考えましょう。

☆「努力を要する」状況（C）

とは

観点別学習状況の評価規準を表しています。

評価規準は、全ての生徒が身に付けるべき資質・能力を観点ごとに「おおむね満足できる」状況（B）として設定するものです。

- ・「十分満足できる」状況と判断されるもの（A）
- ・「おおむね満足できる」状況と判断されるもの（B）
- ・「努力を要する」状況と判断されるもの（C）

☆言語活動に係る学習評価

言語活動ができているのかを表面的に評価するのではなく、各教科等で育成すべき能力等が身に付いているかどうかを評価します。間違えやすいので、特に気を付けたい点です。

● 単元（題材）全体を
● 見通して計画する

5 「指導と評価の計画」を立てる

単元（題材）ごとの計画を考える

☆ 1時間の授業の中で全ての観点を評価しなければならないか？

1 単元時間の授業の中で全ての観点を評価することは大変困難なことです。評価結果を記録する機会を過度に設定することがないように、1 単元時間の中で評価する観点が1～2 観点となるよう設定することが適切です。

単元（題材）によってそのねらい（身に付けさせたい力）は異なります。例えば、外国語の単元で「説明文」は概要及び詳細の理解と表現を、「物語」は概要及び心情の理解と表現をねらいとする、といった具合です。つまり、授業計画を立てるとき1 単元時間ごとに考えていくのではなく、単元（題材）というまとまりで考えた方がねらいを実現しやすくなります。

ねらいの実現を示す評価規準を考える

単元（題材）のねらいが実現されたと考えられる単元（題材）の評価規準を観点別に設定します。そして、ねらいをどのように実現していくか、生徒が学習を積み重ねていくプロセスを考え、1 単元時間ごとに具体的な評価規準を設定し、単元（題材）の中に適切に配置することが大切です。

学習活動を考える

設定した評価規準を実現するための学習活動を考えます。単元（題材）全体の流れの中で、それぞれの授業がどのような位置付けにあるべきか、個々の授業のつながりを踏まえて考える必要があります。教科や単元（題材）によっては評価規準と学習活動の配置を同時に考えていく場合もあります。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

多様な生徒の実態を踏まえた単元（題材）による授業構想

やる気を引き出す活動を展開するために、次のような内容を取り入れてみましょう。

- ①生活につながる内容
- ②経験や既習内容がいかせる内容
- ③探究心を引き出す内容
- ④驚き・発見・疑問が生まれる内容 など → 1章-3

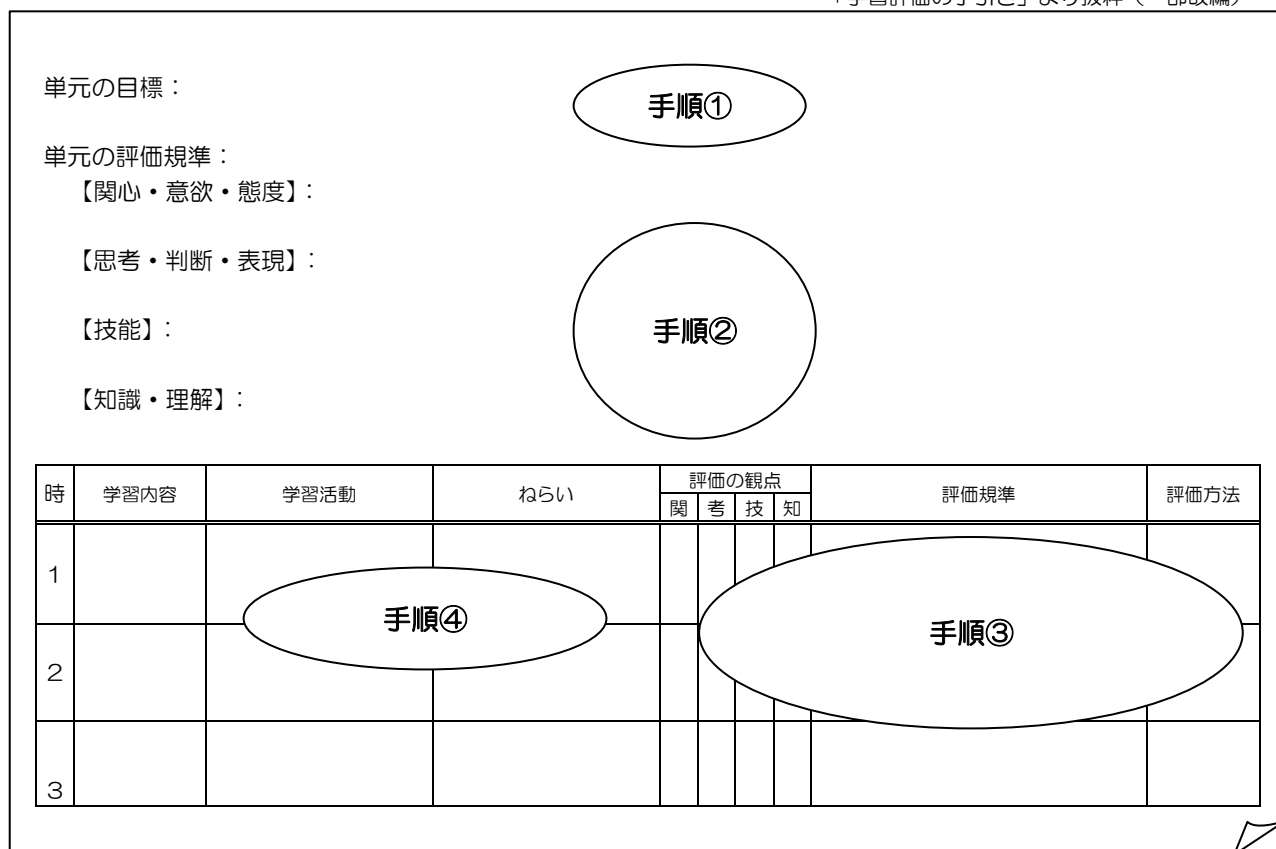


単元（題材）による「指導と評価の計画」

単元（題材）による「指導と評価の計画」を立てるということは、生徒の学びのプロセスをデザインすることであると言えます。

- 手順① 各教科の目標・テーマを基に、各単元（題材）で身に付けさせたい力を明確にする。
- 手順② 目標が実現できた状況を想定し単元（題材）の評価規準を設定する。
- 手順③ 1 単位時間ごとにどの観点を評価していくか、具体的な評価規準を設定し、評価の方法を決める。重視する評価の観点は、単元（題材）を通して、バランスよく設定する。
- 手順④ 評価規準を実現するための学習活動を決める。
- * 手順③④は、相互の整合性を意識して、一体的に計画する。

「学習評価の手引き」より抜粋（一部改編）



具体的な記述の例は、参考資料－2（111 頁）をご覧ください。

単元（題材）の特性と観点別評価

観点別評価について、1 単位時間の中で全ての観点を盛り込む必要がないのと同様、1 単元（題材）の中でも全ての観点を盛り込む必要はありません。観点の特性と単元（題材）で扱う教材の特性を考え合わせ、ある観点に特化して扱う単元（題材）もあるということです。ただし、年間を通した計画の中でそれぞれの観点がバランスよく配置されていなければならないことは言うまでもありません。

6 いつ、どこで、評価するのか

計画的に評価する

授業の中での評価活動を進めるにあたり、評価規準に合わせて評価方法を決め、学習活動を構想することが必要です。

どうやって生徒の思考や発言・行動を見取るのか、学習活動のどの場面で生徒の変容を見取るのか、「努力を要する」状況（C）の生徒へはどのように支援するかを想定し、計画的に評価することを心掛けましょう。

☆「指導にいかす評価」とは何か

学習の過程で行う評価のことをいいます。生徒の学力の定着状況の評価することによって、教師は生徒の教育的ニーズが把握でき、授業にいかすことができます。

また、一方で一定期間での生徒の活動状況を通知表等に記録するために行う評価を、「指導にいかす評価」に対して「記録に残す評価」といいます。詳しくは4章-1を参考にしてください。

指導にいかす評価

単元（題材）の終了後に「評価をして終わり」ということではなく、「生徒の学習状況を適切に評価し、評価を指導の改善にいかす」ことが求められています。そこで、「指導にいかす評価」をすることが大切です。

その日の授業を振り返り、「努力を要する」状況（C）の生徒を正確に把握し、すぐに授業改善に取り組みましょう。生徒一人ひとりに対して学習内容の確実な定着を図ることで、全員が「おおむね満足できる」状況（B）に到達することができます。

「指導と評価の一体化」に取り組み、生徒のためのより良い授業を考えていきましょう。 → 4章-6

評価方法

目標が実現できた状況の評価するためには、観点ごとの評価規準に合わせた評価の方法と学習活動が必要です。その時間に何を身に付けさせるのか、ねらいを明確にして、評価方法を考えましょう。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

小さな一歩を認めよう

生徒が自分の進捗で努力し、学習していることを認めましょう。小さな一歩を認めることで、生徒は自信を持ち学習することが楽しくなります。

目に見える評価

言葉で評価するだけでなく、生徒自身が目で見える形で評価することも大切です。項目ごとにシールやスタンプで印を付けることで達成状況が明確になり、分かりやすくなります。



評価の進め方

評価活動には、生徒の行動や発言の状況の見取り、ノートやワークシート、レポート等の記述や作品、自己評価等のポートフォリオ評価、パフォーマンステストやペーパーテストなどの記述による評価があります。

評価方法の段階

観察・点検

行動の観察・・・学習の中で、評価規準が求めている行動の「観察」をします。

記述の点検・・・学習の中で、机間指導などにより記述の内容を「点検」します。

確認

行動の確認・・・学習の中で、行動などの内容が、評価規準を満たしているかどうかを「確認」します。

記述の確認・・・学習の中で記述された内容を、ノートや提出物などにより「確認」します。

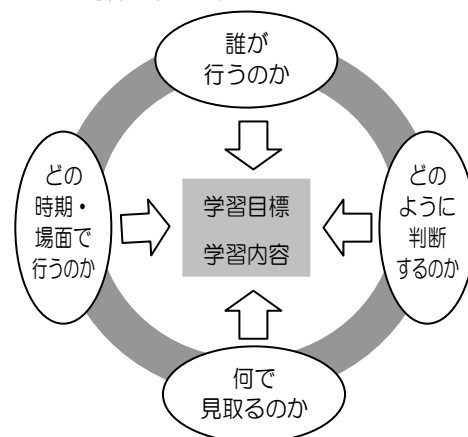
分析

行動の分析・・・「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて、その内容を「分析」的に評価します。

記述の分析・・・「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などの記述の内容を「分析」的に評価します。

<「確かな学力を育てるために」学習評価を踏まえた授業づくりの道すじ
(平成24年3月 神奈川県教育委員会)から抜粋>

図 評価方法の決定



★ポートフォリオ評価とは何か

学習活動において生徒が作成した小論文・レポート・作品など、活動の様子が分かるものを資料として保存し、教師がそれらを用いて何を生徒に身に付けさせることができたか、また何が課題であるのかを具体的に示し伝える評価方法です。この評価を用いることで、教師は生徒の目標到達や課題設定の在り方を考えることができます。

学習活動中での評価

例えば、話し合い活動のとき、どのような評価をすればよいのでしょうか。本時のねらいに合わせて考える必要があります。

一般的には、他人の話を聞いているとか発言をしているといった話し合いそのものの活動状況など量的なものを評価するのではなく、話し合いを通じてその活動のねらいを達成できているかといった質的なものを評価します。ただし、国語の「話す・聞く能力」に係る「関心・意欲・態度」や外国語の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」をねらいとしている場合は、発言をしているといった活動状況も評価の対象となるでしょう。

生徒の「分かる！」を見取るために、授業記録を取ろう！

教師が考える学びの流れは、必ずしも「生徒の分かる道筋」ではありません。生徒が基礎的・基本的な知識や技能を習得し、自ら活用につなげられる授業づくりのために、授業記録を取りましょう。一つの方法として「授業ノート」があります。授業終了後に生徒にノートを渡し、その日の授業をノートに再現させます。生徒に交代でこれに取り組みせることによって、授業の様子や理解の状況、感想などをつかむことができます。

7 学習活動を組み立てる

学習活動とは

学習活動とは学習目標を達成するために行う活動のことです。活動をすること自体が授業の目標である場合と、その学習活動を通して考えることで授業の目標に到達していく場合とがあります。

授業の計画では、その区別を明確にしておくことが大切です。そして、限られた時間内で、最も効果的な学習活動を選び、組み立てることが重要です。

ねらいに合った学習活動を選ぶ

学習のねらいは、各教科・科目の目標です。その目標を実現するために適切な活動を選ぶことが大切です。

そして、学習活動を組み立てる際には、クラス全体で行うのか、少人数のグループで行うのか、個人で行うのかといった学習形態も合わせて考えましょう。

言語活動の充実

学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等の育成のため、各教科・科目での言語活動の充実が求められています。

その活動には、生徒が自分の考えをまとめる活動、自分の考えを言葉を使って表現する活動、考えを交流する活動、他人の意見を聞き自分の考えを深める活動等があります。

3章一2、参考資料一3、参考資料一4に詳しい説明がありますので、確認しておきましょう。

☆学び合いの場面をつくる

学び合いは、生徒が主体となり、生徒同士が意欲を高め合う学習活動です。教師が提示した課題に対して、生徒同士協議をしながら解決方法を探るのです。分からないところも、生徒がグループをつくり相談して解決します。生徒同士が交流することで、それぞれの生徒の知的好奇心や探究心が刺激されます。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

主体的な参加を促すために

学習活動の中に生徒が得意な内容を取り入れたり、取り組むべき課題を生徒自身が選べるようにするなど、生徒が主体的に授業に参加できるよう工夫しましょう。



自分の考えをまとめる活動

・個別学習

じっくりと資料を読んで調べたり、根気強く作業を進めたりしながら、自分の考えをまとめる学習活動です。考えをまとめる際には、書く活動を取り入れると、考えがより明確になりますし、後で振り返ったときに自分の考えの変化について気付くことにもつながります。

言葉を使って表現する活動

・グループワーク

少人数のグループで個々の考えを交流し、グループごとの考えをまとめて発表する活動です。グループの意見としてまとめる活動を通して、互いの考えを認め合い、自分の考えを深めることにつながります。

考えを交流する活動

・ペアでの話し合い

話し合いが苦手な生徒には、ペアでの学習が有効です。はじめに話し合いのテーマを確認し、自分の考えをまとめさせましょう。次に、話す時間を決めて一人が話します。聞き手はじっくりと話を聞きます。そして、話し手と聞き手は教師の合図で交代します。

互いの考えをじっくりと聞き合った後、考えを交流します。

・ブレインストーミング

自分の考えやひらめき、アイデアを自由に出し合い、そこから想像と連想を働かせて多くのアイデアを生み出す発散思考の代表的な手法です。グループで行うと、協議しやすく意見もまとまりやすいので効果的です。

考えを深める活動

・ロールプレイング

ロールプレイングは、場面を設定して役割を演じる体験活動を通して、気付きを得る活動です。友達の演技を見て気付いたことや、自分自身が役割を演じながら気付いたことなどから、自分の考えを深めます。

・振り返り

学習の振り返りも大切な学習活動です。授業で考えたこと、学んだことを振り返り、書く活動を取り入れるとよいでしょう。

☆「話し合い活動」の良さ

話し合い活動を通して、新しい内容や考えが見つかる、思いもしないような結論が出る、生徒たちの考えが変わる、新しい疑問が出てくるなどの効果が考えられます。

ただし、話し合い活動を行う際には、何をねらいとするのか、はじめに決めてから取り組みましょう。

☆ブレインストーミングのコツ

たくさんの意見やアイデアを出して欲しいけれど、なかなか出ないとき、付箋紙を活用してみましょう。

アイデア一つにつき1枚、どんどん書き出していきます。付箋紙に一言ずつ書く作業は簡単にできますし、後で考えを分けたり、まとめたりする作業もしやすくなります。

「分からないときは、友人にたずねる」と回答する生徒 66%

「神奈川県立高等学校学習状況調査」によると「授業で分からないことがあったとき」に「友人にたずねる」と回答した生徒が最も多く、6割以上にもなります。生徒同士の学び合いは、生徒にとって良い活動といえるでしょう。また、人に分かるように説明できて、初めて本当に分かったと実感するものです。友達に教える活動は、教える生徒自身の理解した内容の整理に役立ち、より一層の理解を深めることができるでしょう。

授業改善の視点を持ち
続けよう

8 「主体的・対話的で深い学び」

「主体的・対話的で深い学び」の実現

これからの教育は、生徒たちが「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということが大切であり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の資質・能力の三つの柱を、いかに総合的に育てていくかが求められています。

このためには学びの量とともに、質や深まりが重要であり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善への取組（いわゆる「アクティブ・ラーニング」の視点）が注目されています。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

☆アクティブ・ラーニングの 視点からの授業改善

形式的に対話やグループ学習のような「型」を取り入れるのではなく、生徒の興味関心から個性に応じた質の高い学びを引き出し、どのような資質・能力を育むのかという観点から、学習の在り方そのものを問い直し改善を目指すものです。

大切なのはこれからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることです。そこで、資質・能力を育成するため、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点から授業改善に取り組んでいきましょう。

中央教育審議会の答申では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の工夫・改善の視点を以下のように示しています。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

「主体的・対話的で深い学び」の実践

上記で述べたような学びを実現するための学習・指導方法は限りなく存在し得るものであり、教員一人ひとりが、生徒たちの発達段階や発達の特性、学習スタイルの多様性や教育的ニーズと教科等の学習内容、単元の構成や学習の場面等に応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択することが必要です。

具体的な内容としては、次のような例が参考になります。

【主体的な学び】

- 学ぶことへの興味や関心を持たせる。
- 毎時間、見通しを持って粘り強く取り組ませる。
- 自らの学習をまとめ振り返り、次の学習につなげる。

【対話的な学び】

- 実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたりする。
- 実社会の人々の話を聞いたりすることで自らの考えを広める。
- 生徒同士の対話に加え、生徒と教員生徒と地域の人、本を通して本の作者などとの対話を図る。

【深い学び】

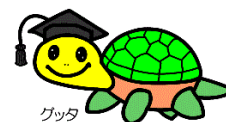
- 事象の中から自ら問いを見だし、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組む。
- 精査した情報を基に自分の考えを形成させる。
- 目的や場面、状況等に依って伝え合ったり、考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成したりしていく。

これらの三つの視点は、学びの過程としては一体として実現されるもので、それぞれ相互に影響し合うものですが、学びの本質の重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意が必要です。また、相互のバランスに配慮しながら学びの状況を把握し改善していくことも求められます。

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法や指導の「型」のことでも、学校教育における教員の意図性を否定することでもありません。また、今までの授業時間とは別に新たに時間を確保しなければできないものではなく、現在既に行われているこれらの活動を、「主体的・対話的で深い学び」の視点で改善し、単元や題材のまとまりの中で指導内容を関連付けつつ、質を高めていく工夫が求められています。

「見方・考え方」

授業改善が表面的な活動に陥らないためにも「深い学び」の視点は重要となってきます。その際にポイントとなるのは、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」です。学習の内容と方法の両方を重視しながら幅広い授業改善の工夫を実践してください。具体例は欄外の参考資料を見てください。



☆単元を意識した授業構想、 教材研究

「主体的・対話的で深い学び」は1単位時間の中で全てが実現されるわけではありません。実現のためには、単元や題材のまとまりの中で、主体的に学習を見通す場面やグループで対話する場面、教員が教える場面等を構想する視点が求められます。

「主体的・対話的で深い学び」に関する参考資料

- 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）平成28年12月21日 中央教育審議会
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)

9 学習目標に合った教材

教材とは

教材とは、学習目標を実現させる材料、すなわち生徒に理解させたい知識や概念、習得させたいスキルなど生徒に身に付けさせたい力を実現化させるための具体的な材料のことです。身に付けさせたい力が同じであったとしても、学習者が異なれば、学習者に合った方法や題材、道具等の具体的な材料が異なる場合があります。

学習目標に合った教材を工夫することが必要です。

☆教材と教具の違い

教材とは、教える内容のことをいいますが、教えるための題材や道具を含む場合があります。

教具は教えるための道具という意味合いが強いです。教材の方がより広い範囲を指し示していることが多いといえます。

例えば、理科で電圧を計測する実験をするときの電圧計は、電圧を計測する方法を理解させるための教材ですが、計測するための道具として示す電圧計は教具になります。

特に必要のない場合は区別せず、教材・教具として表しています。

生徒の実態を把握する

教材を選ぶ際に、生徒の実態を把握する必要があります。生徒の予備知識や興味・関心の程度などのレディネスを把握して、効果的な教材を考えましょう。また、生徒の学ぶ姿についても予測しておきましょう。

教材を評価する

工夫され、入念に計画された教材であっても、実際に授業を行うと、教師の意図と生徒の感じ方が全く同じであるとは限りません。教材の効果を必ず確認しましょう。

まずは、生徒に身に付けさせたい力が育成できたかどうかを評価します。そして、そのための学習活動を充実させる教材であったかどうかを評価します。

また、授業中の生徒からの質問内容、授業後に行うアンケートや、生徒との会話からの感想の聞き取りなども評価の方法として用いることが考えられます。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

認知の特性に応じた教材

生徒の認知の特性に合った教材を用意しましょう。視覚（文字、イラスト、写真、映像）、聴覚（言葉）など、一人ひとりの生徒の認知の特性には違いがあります。授業では、様々な伝達方法を工夫しましょう。個別の課題を用意する場合は、その生徒の興味や関心に合わせた教材を取り入れましょう。まずは教材に対して、興味を持って向き合えることが何よりも大切です。



教材の工夫の視点

目標の確認

学習目標を十分に把握し確認することが、教材の有効性を判断する基盤となります。

教材の選択

取り扱う教材が、生徒にとって学ぶ意義を感じさせるものか、生徒の関心を高めるものか、時代の要請を受けているものかなどの視点から選ぶことができます。

提示の方法

説明する対象を動画で提示すると、動きを含めて説明することができますが、細部にわたりじっくり説明するためには写真の方が良い場合があります。さらに、特徴を説明する際には unnecessary な細部を省略したイラストが効果的である場合もあります。このように、何をどのように伝えるのかによって提示の方法が異なります。

生徒の思考の流れ

例えば、アルカリ金属の一般的な性質について説明してから、Li、Na、K 等の個々の性質を説明するのか、個々の元素の性質からアルカリ金属の一般的な性質を導き出すのか、授業の流れは何通りか考えられます。Li、Na、K 等の個々の性質について予備知識がなければ、アルカリ金属の一般的な性質を導き出すのは難しいかもしれません。このように、生徒の思考の流れに沿った教材を工夫する必要があります。

期待される効果

選択した題材が、生徒にとってどのような学習効果があるかを予測しましょう。そして、授業を実践したら、どのくらい効果があったかを評価する必要があります。そこから、成果と課題を把握し次の授業に反映させていくことが、授業力の向上につながります。

☆教科書をどのように使うか

よく「教科書で」教えるといいますが、それは「教科書を」教えることが学習目標ではないということです。

教科書は最も身近な教材です。生徒の具体的な学習活動を想定して、効果的な使い方を工夫してみましょう。

☆コンピュータは万能か

現在の発達した情報通信技術(ICT)では、様々な方法で教材を提示することができます。

しかし、コンピュータの画面で提示するだけだととは限りません。

場合によっては、板書や紙に書いたものを提示することが良い方法の場合があります。

ICTの活用については、3章-8を参照してください。

地理・理科の教材で衛星写真を利用する

大地の形状や土地の利用状況をとらえるには、衛星写真の利用が有効です。次の場所に世界各地の衛星写真があります。

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 だいち写真ギャラリー

(<http://www.sapc.jaxa.jp/gallery/index.php>)

10 ポイントは授業構成

単元（題材）の「導入・展開・まとめ」

毎時間の授業にも、開始から終了に至る流れはあります。しかし、指導計画は単元（題材）全体を見通して立てるものです。「導入・展開・まとめ」は、1 単位時間の授業というより、学習のまとまりごとに設定するものと考えるとよいでしょう。

ただし、はじめにどのような活動をして意欲を喚起しようか、中心となる学習活動は何か、次の時間にどうつなげるかといった1 単位時間の授業の構想は必要です。

1 単位時間の構想

1 単位時間の授業は、「指導と評価の計画」（2章－5）の中に位置付けられたものです。目標の実現のために、観点別の評価規準を配置して本時の学習の構想を練ります。

1 単位時間の授業内容は、ほかの授業内容とつながっています。各時間の授業の位置付けを確認し、どうしたら効果的に生徒が目標を実現できるかを考えながら、それぞれの授業の構成を考える必要があります。

授業構想の4つのポイント

次の要点に沿って1 単位時間の流れを構想しましょう。

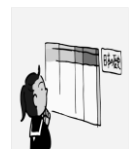
- ★ 本時で身に付けさせたい力の確認
- ★ 評価の場面と方法を想定
- ★ 主体的な学びを促す工夫
- ★ 時間配分と山場づくり

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

学習集団にマッチした授業構成を！

話すことが苦手、聞くことが苦手、書くことが苦手、話し合いが苦手…どの学級にも特性を持った生徒がいます。彼らの特性を把握し、各学級に合った授業構成を考えることが大切です。彼らも授業に参加したい、理解できるようになりたいという気持ちを持っている生徒です。

単元指導計画や学習指導案の中に、「書くことが苦手な生徒には、机間指導の中で書きたい内容に気付かせる」、「聞くことが苦手な生徒がいるので発問の内容は板書する」など、生徒に応じた配慮事項を書き加えられたらさらに良いですね。



〈例〉 「国語・国語総合・小説」 「羅生門」

《単元の目標》（全5時間）

- ・文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう。（読むことウ）
- ・文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにする。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ（イ））

《具体的な評価規準》（2時間目）

- ・人物、心情などを、どうして書き手がこのように描いているのかを捉え、象徴、予兆などに果たしている効果に気付こうとしている。（関心・意欲・態度）
- ・人物、心情などを、どうして書き手がこのように描いているのかを捉え、象徴、予兆などに果たしている効果に気付いている。（読む能力）
- ・語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにしている。（知識・理解）

《本時の流れ》（50分授業）

評価の観点と方法	分	学習活動と指導上の留意点
<p>【評価規準】 人物、心情などを、どうして書き手がこのように描いているのかを捉えている。（読む能力）</p>	3	<p>・本時の学習の見通しを立てる 「物語の続きを創作するために、場面ごとの下人の心情とその変化を捉える」</p>
<p>【評価方法】記述の確認 下人の心情の変化についてまとめたワークシートの記述を確認する。</p>	3	<p>①グループをつくり、担当する場面を決める。</p>
<p>【Cの生徒への手立て】 ②の場面 机間指導を行い、まずは本文の該当箇所を線を引き、その後でまとめるよう助言する。</p>	14	<p>②個人で担当部分の整理をする。</p>
<p>③④の場面 ②でまとめたものを基にして話し合うとともに、他者の意見をよく聞き、記録するように助言する。</p>	10	<p>③担当部分を持ち寄り、グループで心情の変化を捉える。</p>
<p>⑤の場面 机間指導を行い、③④の場面での記録を参考に自分の考えをまとめるよう助言する。</p>	15	<p>④同じ場面を担当している者同士で集まり、内容を再検討する。</p>
	5	<p>⑤もとのグループに報告できるよう、④の再検討の結果を個人でまとめる。</p>
		<p>【指導上の留意点】 下人の心情を考える際には、必ず本文の記述を根拠とさせる。 （次時は元のグループに戻り、④で得た意見や表現の効果などを確認しながら、もう一度下人の心情の変化についてまとめる→「物語の続き」の創作へつなげる）</p>

本時は、「読む能力」の評価規準のうち、人物、心情などを、どうして書き手がこのように描いているのかを捉えることを、目標としています。

はじめに、学習活動の流れと、活動の意義や目的を明確にすることが大切です。

話し合い活動の前には、個人の考えを形成する時間を十分に確保します。

途中でグループを組み替えることで、考える視野も広がり、学習活動が単調になることも防ぐことができます。

話し合いの結果を個人の考えにいかすための時間も、確保する必要があります。

本時の「評価規準」は、「人物、心情などを、どうして書き手がこのように描いているのかを捉えている」です。必ず本文の記述に基づいて考えたり話し合ったりするよう、1時間を通して常に意識付けすることが大切です。

90分の授業構成

90分間、生徒の興味や関心、集中力などを持続させるのは難しいものです。そこで、授業の構成の工夫が必要になります。例えば、「書く」、「話し合う」、「読む」といった活動を効果的に取り入れます。その際には、それぞれの活動が生徒の学びの深まりにつながるものとなるよう心掛けましょう。ただ、気分転換のためだけに取り入れる活動は望ましくありません。

また、90分という時間をいかし、じっくりと考えさせたり、十分協議させたりすることができます。そのための資料の準備や展開の工夫などを考えることも大切です。